様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 25 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９～２０１２
課題番号：２１５２００３８

研究課題名（和文）生命倫理学における安楽死・尊厳死論のキリスト教的基盤に関する歴史的社会的研究

研究課題名（英文）Historical Social Research on the Christian Basis of Euthanasia / Death with Dignity in Bioethics

研究代表者
大谷　いづみ（OTANI IZUMI）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：３０４５４５０７

研究成果の概要（和文）：

本研究は、生命倫理学における安楽死・尊厳死論とキリスト教との関連性を歴史的・社会的に解析する企てである。その成果として、(1) 生命倫理学黎明期のキリスト教神学者、J.フレッチャーの原著作の蒐集、(2) 彼の“Dysthanasia”, “Anti-Dysthanasia”概念と日本の「尊厳死」言説との関係の解析、(3) 安楽死・尊厳死運動において切腹や棄老伝説における「自死」が日本人の美徳としてキリスト教と対置されていること、(4) 臓器提供を「自己犠牲」として期待する語りの構造を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this research was to analyze historically and socially the relationship between discussions on euthanasia / death with dignity and Christianity. The following four points were addressed: (1) the collection of works of J. Fletcher, who was a pioneer in bioethics; (2) an analysis of the relationship between Fletcher's “Dysthanasia” / “Anti-Dysthanasia” concepts and the discourses on “death with dignity” in Japan; (3) “autocide” in Bushido and “granny damping” as Japanese virtues in discussions on euthanasia / death with dignity movements were compared to a Christian inspired approach; (4) an analysis of the discourse structure that presents organ donation as “self-sacrifice”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：安楽死、尊厳死、フレッチャー、自殺、武士道、棄老伝説、楢山節考、死生学

１．研究開始当初の背景

日本の生命倫理におけるキリスト教理解は、日本的生命倫理・死生観を強調して対置されるか、pro life vs. pro choice, SOL vs. QOL といったステレオタイプな理解にもとづく叙述の域をでないことがしばしばである。米国のヒト胚をめぐるリベラル派とキリスト教保守派の長年の対立や、2003 年の米国大統領評議会報告書『治療を超えて』をめぐる論議を見れば、こういった理解は無理のないことではあるが、近年の研究では、バイオエシックス成立期において、現在了解されている以上にキリスト教との葛藤と影響が強かったこと（土井健司 2007）が指摘されている。

しかしながら、特にこれまでの日本の安楽死・尊厳死論は、死生観という文化的・宗教的価値観を内包するがゆえに、上記のようなステレオタイプなキリスト教理解に基づく二項対立の構図に付置して了解されてきた。

「尊厳死」が「安楽死」と切り分けられて来た第二次世界大戦後日本の安楽死・尊厳死論に関する筆者のこれまでの歴史研究をふまえ、本研究では、生命倫理学における安楽死・尊厳死論とキリスト教との関連性を上述したようなステレオタイプな理解とは異なる角度から歴史的・社会的に解析することによって、生命倫理学の自律原則と、「自分らしい、人間らしい、尊厳ある死」を希求する「尊厳死」言説との関連性について、新たな分析視覚の掘り起こしが可能であると考えた。

２．研究の目的

日本におけるこれまでの安楽死・尊厳死論は、生命倫理学をユダヤ・キリスト教の伝統に対する新しい世俗の医療倫理としてのみ付置し、安楽死・尊厳死を SOLvs.QOL、pro life vs. pro choice といったステレオタイプなキリスト教理解に基づく二項対立の構図によって了解されている。しかしながら、1930 年代の米英安楽死協会の設立者にはプロテスタントの自由主義神学者が名を連ねている。

そこで、本研究では、特に、生命倫理学の黎明期に、その誕生を先駆的に牽引した「3 人の米国の神学者のうちの一人」（Jhonsen, A. 1999）であるジョセフ・フレッチャー（Fletcher, Joseph,1905-1991）の「安楽死」に関する言説に焦点をあて、キリスト者フレッチャーがどのような論理で安楽死の合法化を推進したのか、さらにはその思想と行動が米国での生命倫理学の誕生とその日本への導入に果たした役割を実証し、それによって、「尊厳ある死」の言説の生成と日本における生命倫理学の導入・展開の歴史との関係を、キリスト教との関連において解明することを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、第二次世界大戦前後の日米キリスト教界の安楽死・尊厳死論に関する言説を解析することにより、生命倫理学における「安楽な死・尊厳ある死」をめぐるキリスト教的基盤を歴史的・社会的に明らかにする。安楽死・尊厳死論のメルクマールとしてカレン・アン・クインラン事件（1975-1976）を据えるが、特に、生命倫理学の先駆者とも言われる神学者、ジョセフ・フレッチャーに焦点をあてた。*morals and medicine*（1954＝1964）や *situation ethics*（1966＝1971）で生

命倫理学界や哲学・倫理学界に知られた元米国聖公会牧師のジョセフ・フレッチャーは、1930 年代、ロンドンのスラム街にある教会で社会活動を行った経歴を持ち、戦後は米国の安楽死運動を展開した人物でもあった。本研究は彼の言説とその来歴に着目し、彼のキリスト教神学・倫理学にもとづく思想・言動と安楽死・尊厳死論の関係を解析した。また、フレッチャーが 1962 年に提案した“Dysthanasia”と“Anti-Dysthanasia”概念を検討し、その日本への紹介導入（宮野彬 1970）と日本における「尊厳死」言説の淵源とを検証した。

具体的には以下の調査研究を行った。

(1) フレッチャーの著作を網羅的に蒐集して整理し、第二次世界大戦前からの彼の多彩な活動と著作から全体像を把握した。彼の死後編まれた *Joseph Fletcher: memory of an EX-RADICAL*（1993）の bibliography ほかに記載された文献のほか、戦前の文献や米国安楽死協会のニューズレターの一部などを蒐集した。さらに、日本での活動（1963-64）記録を招聘先である国際基督教大学やプロテスタント系の雑誌、学術誌などをあたって調査を進めた。

(2) フレッチャーが 1962 年に提案した“Dysthanasia,”“Anti-Dysthanasia”概念の検討をおこなった。さらに、フレッチャーの思想全体の中で上記概念の占める位置を、彼の他の著作から考究した。

(3) 上記概念の日本への翻訳紹介とその影響について、キリスト教的基盤との関連性に焦点をあてながら、刑法、医事法、安楽死運動、クインラン事件との関係において検討した。

４．研究成果

本研究の成果を以下に列挙する。

(1) フレッチャーの広範な著作の網羅的な蒐集・整理について、一定程度の完成をみることができた。また、彼の原著論文だけでなく、フレッチャーが日本滞在時に客員教員をつとめた国際基督教大学にて近しい関係にあった古屋安雄氏への調査や著作から、日本での活動の一端が明らかになった。

(2) フレッチャーが造語・提案した“Dysthanasia,”“Anti-Dysthanasia”概念と日本の「尊厳死」言説との関係を分析し、両者の深い結びつきを明らかにした。さらに、彼が 1954 年に公刊した *morals and medicine*（1954＝1964）には、安楽死・尊厳死だけでなく、現在の生命倫理学のトピックが挙げられているが、そこには、「死を選ぶ権利」「子を産むことを断念する権利」などを「われわれ（患者）の権利」と表しつつ、その実際は「患者の義務」を含意するフレッチャー独特のロジックが隠されていること、その際、神学・聖書学などのキリスト教を基盤とした言辞が用いられていることを明らかにした。

(3) 日本における安楽死・尊厳死論の分析をキリスト教との関連性において解析した。そのなかで、キリスト教圏における安楽死・尊厳死論の生成過程と対比する形で「自死」が日本の伝統的死生観の発露として、さらには日本人の美徳として語られていること、しかし、そこで取りあげられる武士道や特攻隊は、特定の階層に名誉とともに強いられた処刑や戦闘の様式であること、また、老人が自ら死地に赴く「楢山節考」の原型である棄老伝説は、本来は養老を説くものであったことを明らかにするとともに、それらがとり

わけ「安楽死・尊厳死」運動において選好的にとりあげられていることを指摘した。

(4) 発展的な調査として、生命倫理問題を遠近で扱った小説や映画作品にキリスト教の有形無形の痕跡をさぐった。特に、2011 年春、日系の英国ブッカー賞受賞作家、カズオ・イシグロの小説 *Never Let Me Go* の映画化作品が日本でも公開されたことに機会を得、これを中心に臓器移植を扱った作品群をとりあげて臓器移植と安楽死・尊厳死問題との関係、さらには「(自己) 犠牲」というキリスト教思想の核をなす概念との関係を解析した。

なお、以上の研究成果は、「５．主な発表論文等」に記載したように、日本生命倫理学会を中心とする学会・研究会報告や国際誌を含む学術論文・図書などのほか、教育・福祉関連の対人援助職研修会や一般市民向けのセミナーや図書などを通してより広汎な対象に公開し還元することができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① 大谷いづみ、「図書紹介：立岩真也・有馬斉編『生死の語り行い I――尊厳死法・抵抗・生命倫理学』」、『リハビリテーション』、査読無、554 号、2013、pp.32-33

② 大谷いづみ、「「理性的自殺」がとりこぼすもの――続・「死を掛け金に求められる承認」という隘路」、『現代思想』、査読無、41 巻 7 号、2013、pp.162-177

③ 大谷いづみ、「犠牲を期待される者――「死を掛け金に求められる承認」という隘路」、『現代思想』、査読無、40 巻 7 号、2012、pp.198-209

④ 竹之内裕文・大谷いづみ、「生活のなかの死：地域社会での看取りを考える」、『医学哲学医学倫理』、査読無、29 巻、2011、pp.77-78

⑤ 大谷いづみ、「いのちの教育：　臓器提供を「訓育」する装置？――カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を「豚のＰちゃん」の教育実践とともに読み解く」、『立命館産業社会論集』、査読有、47 巻 1 号、2011、pp.237-258

⑥ OTANI, Izumi,'Good Manner of Dying' as a Normative Concept: 'Autocide,' 'Granny Damping,' and Discussions on Euthanasia / Death with Dignity in Japan, *International Journal of Japanese Sociology,* 査読無, No.19(1), 2010, 49-63

⑦ 大谷いづみ、「「尊厳ある死」を望むこと」、『福音と世界』、査読無、5 月号、2009、pp.44-45

〔学会発表〕（計 13 件）

① 大谷いづみ、「「自分らしく、人間らしく」死にたい？」、修学院フォーラム「高齢を生きる――認知症・胃ろう・尊厳死を見据えて」、2013 年 1 月 19 日、関西セミナーハウス（京都府）

② 大谷いづみ、「問いをはぐくむ」、日本教育新聞社教育セミナー「今、求められるいのちの教育」、2012 年 12 月 1 日、たかつガーデン（大阪府）

③ 大谷いづみ・香川千晶、「生命倫理教育の再考」、第 24 回日本生命倫理学会年次大会大会企画シンポジウムオーガナイズ、2012 年 10 月 27 日、立命館大学（京都府）

④ 大谷いづみ、「生・老・病・死の言説構造

と生命倫理教育／死生観教育」、第 24 回日本生命倫理学会年次大会大会企画シンポジウム「生命倫理教育の再考」、2012 年 10 月 27 日、立命館大学（京都府）

⑤ 大谷いづみ、「生命倫理（学）と生存学のやっかいな関係について――たいていは是非論の単純な問題「解決」には終わら／終えられない ver.2」、生存学セミナー、2012 年 8 月 22 日、京都キャンパスプラザ（京都府）

⑥ 大谷いづみ、「「自分らしい死」を支えるということ――「わたし・たち」の仕事と死生観」、摂津いやし園職員研修講座、2011 年 12 月 8 日、摂津いやし園（大阪府）

⑦ 大谷いづみ、「たいていは是非論の単純な問題「解決」には終わら／終えられない――「いのち」を語ること／教えること」、生存学セミナー、2011 年 9 月 14 日、京都キャンパスプラザ（京都府）

⑧ 大谷いづみ、「日本における「生命倫理の成立」再考――オーラル・ヒストリー調査の結果から」第 22 回日本生命倫理学会研究大会シンポジウムオーガナイズ、2010 年 11 月 20 日、藤田保健衛生大学（愛知県）

⑨ 竹之内裕文・大谷いづみ、「生活のなかの死：地域社会での看取りを考える」日本医学哲学・倫理学会シンポジウム、2010 年 10 月 16 日、岩手医科大学（岩手県）

⑩ 大谷いづみ、「生命倫理教育の再構築」、第21回日本生命倫理学会研究大会シンポジウムオーガナイズ、2009年11月15日、東洋英和女学院大学横浜校地（神奈川県）

⑪ 大谷いづみ、「J.フレッチャーとバイオエシックスの交錯――フレッチャーの anti-dysthanasia概念」、第21回日本生命倫理学会研究大会シンポジウム「生命倫理の歴史的現在――メタバイオエシックスの視点から」、2009年11月15日、東洋英和女学院大学横浜校地（神奈川県）

⑫ 大谷いづみ、「「パッケージ化する「よき死」の作法」、シンポジウム「死生学×生存学・対話１」第二部「死生を学ぶ？」、2009年9月6日、東京大学・本郷キャンパス医学部鉄門記念講堂（東京都）

⑬ 大谷いづみ、「高校「倫理」の教育内容と教科書編集に関わる諸問題？――「いま」「ここ」で「知を愛すること／善く生きること」を問う営み」、日本哲学会第68回大会ワークショップ「高等学校「哲学・倫理」の現状と課題」、2009年5月17日、慶応義塾大学三田キャンパス（東京都）

〔図書〕（計 7 件）

① 大谷いづみ、「第 6 章 患者および一般市民のための生命倫理教育――パッケージ化された「生と死の物語」の構造を読み解く」伴信太郎・藤野昭宏責任編集『医療倫理教育』(シリーズ生命倫理学・第 19 巻)、丸善、2012、255p（pp.108-128）

② 大谷いづみ、「生命倫理・環境倫理」日本社会科教育学会編『新版　社会科教育事典』、ぎょうせい、2012、435p（pp.216-217）

③ 大谷いづみ、「尊厳死」高橋惠子ほか編『発達科学入門３　青年期～後期高齢期』、東京大学出版会、291p（pp.280-281）

④ 大谷いづみ、「「自分らしく、人間らしく」死にたい？――安楽死・尊厳死」「あとがき」、玉井真理子・大谷いづみ編、『はじめて出会う生命倫理』、有斐閣、2011、321p（pp.187-208、313-315）

⑤ 大谷いづみ、「「尊厳死」思想の淵源――J.フレッチャーのanti-dysthanasia概念と

バイオエシックスの交錯」小松美彦・香川知晶編『メタバイオエシックスの構築へ――生命倫理を問いなおす』、NTT出版、2010、275p（pp.207-233）
⑥ 大谷いづみ、「先哲の基本的な考え方の学習」「「科学技術と倫理」の学習」公民教育学会編『公民教育事典』、第一学習社、2009、270p（pp.122-123, 136-137）
⑦ 大谷いづみ、「死の教育」「尊厳死」、望月昭・中村正・サトウタツヤ編『「対人援助学」キーワード集』、晃洋書房、2009、247p（pp.95-96, 139-140）

６．研究組織

(1)研究代表者

大谷　いづみ（OTANI IZUMI）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：30454507

(2)研究分担者

なし